

● 作品タイトル

洗面所のメリークリスマス

● ペンネーム

甲斐てつろう

【あらすじ】

クリスマスシーズンの北海道。

とある団地でネグレクトを受ける少女が、

自分だけのクリスマスを祝うため健気に小銭を集める短編物語。

【登場人物】

少女(12) : ネグレクトを受ける少女

店員(20) : コンビニ店員のお姉さん

母(35) : 少女の母

彼氏(26) : 母の彼氏

その他

【本編】

○団地 道路 自販機前

雪の降るクリスマスシーズンの北海道。

スーツ姿の男性が自販機で飲み物を買おうと財布から小銭を出す。

男性「あっ……」

男性、小銭を雪の中に落としてしまう。

小銭、積もった雪の中に消える。

男性、諦めて新しい小銭を取り出し飲み物を買って去った。

少女(12)、そこに走って現れる。

素手で雪を掻き分ける少女の手は真っ赤。

雪の中から10円玉を見つけ出した。

○メインタイトル

『Merry Christmas, Miss.Loneliness』

○コンビニ 店内

店内にクリスマスセールの垂れ幕。

少女、棚にあるクリスマスセールのケーキを見つめる。

値札を見た後、10円玉を握りしめ出ていく。

店員(20)、少女の背中を心配そうに見つめる。

○団地 少女の家 居間

少女、帰宅。

母(35) 叱る。

母「こっち入って来るなって……!」

母、少女の頭を何度も叩く。

少女「っ……」

母「これから彼氏来るんだからあっち行ってて」

母、少女を洗面所に押しやる。

○団地 少女の家 洗面所

少女、洗面所の棚を漁る。

小さな籠に小銭がいくつか入っていた。

少女、小銭を数えて溜息を吐く。

× × ×

少女、洗面所の床に寝転がりながら母とやって来た彼氏(29)の会話を聞いている。

母「えーこっちの店が良いー」

彼氏「そこ高えだろ、俺も金ないんだよ」

母「せっかくのクリスマスディナーなんだからさ、ちょっとくらい奮発しても良くな

い?」

彼氏「わがまま言うなよ、こっちもカツカツなんだ」

彼氏、少女の存在に言及。

彼氏「そいえばアイツの飯は？」

母「あー適当にこれくらいあげとけば良いよ」

母、洗面所の扉を開け少女に残飯を渡す。

少女、母が去った後に残飯を貪る。

○団地 少女の家 居間(夜)

少女、母と彼氏が寝たのを確認し皿をキッチンに置く。

すると点けっぱなしのTVが目に映る。

クリスマス映画が放映されていた。

少女、家族でケーキを分けるシーンを見つめる。

○団地 道路 自販機前(日替わり)

少女、自販機前の雪を掻き分け100円玉を見つけ目を輝かせる。

○団地 少女の家 居間

少女、帰宅。

母、少女に怒る。

母「ちよつとどこ行つてたの、あんたが帰って来なきゃ出れないじゃん」

母、少女の真っ赤な手を見た。

母「ちょっと何この手？ やめてよね、児相とか通報されたら面倒だからさあ」

少女、暗い面持ちで洗面所に入る。

○団地 少女の家 洗面所

少女、お湯で真っ赤な手を洗う。

そして拾った100円玉と集めた小銭を合わせ目を輝かせた。

居間からは母と彼氏の声が聞こえて来る。

彼氏「そろそろ行くかー」

母「ちゃんと予約できてるよね？」

彼氏「大丈夫だって」

母、洗面所の扉を開ける。

少女、慌てて小銭を隠す。

母「私たちディナー行つて来るから、適当に冷蔵庫にあるもん食べて」

母と彼氏、出て行く。

少女、洗面所から顔を出す。

玄関を覗き支度をした。

○団地 道路

少女、小銭を素手に持ち走る。

しかし凍った地面で滑って転んでしまい小銭を側溝に落としてしまう。

通りすがりの男性、少女を見るがすぐに目を逸らし通ら過ぎる。

少女、倒れたまましばらく起き上がらない。

涙も流れていなかった。

そして静かに立ち上がり服についた雪や泥を払い歩き出した。

少女の膝、擦りむいていた。

○コンビニ 店内（夜）

少女、膝や手を擦りむいた状態で入店。

店員、心配そうに見つめる。

少女、トボトボと棚のケーキを見るが売り切れていた。

少女、肩を落とし店を出る。

○道路（夜）

少女、トボトボと歩く。

店員、救急箱と袋を持ち走って来る。

店員「待って！」

少女、立ち止まり振り返る。

店員、少女に救急箱を見せる。

店員「これ、怪我してるでしょ？」

店員、少女を座らせ傷の手当てをする。

店員「これでヨシっと」

店員、少女が立ち上がると袋を差し出す。

店員「はいコレ、欲しがってたでしょ？」

少女、袋の中を見るとケーキと蝋燭が入っていた。

少女、目を輝かせ店員を見る。

店員「私からのクリスマスプレゼント」

少女、目に涙を浮かべる。

店員「メリークリスマス、お嬢さん」

少女、嬉しそうに走って帰る。

一度立ち止まって振り返り店員に手を振った。

○団地 少女の家 洗面所（夜）

少女、袋を漁る。

中には小さなケーキと蝋燭が一本入っていた。

少女、洗面所を暗くしケーキに刺した蝋燭に火を着ける。

鏡に写るケーキを持った自身の笑顔を見ながらそっと囁いた。

少女「……メリークリスマス」

少女、フツと火に息を吹きかけ消した。

洗面所は火が消え真っ暗となった。

少女の笑顔の残像だけが残された。

（了）